

ウズベキスタン、カフィル・カラ遺跡の発掘調査 (2018 年)

—シタデルを覆う火災層の調査—

村上 智見 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター研究員
 ベグマトフ・アリシエル ベルリン・ブランデンブルク科学アカデミートルファン学研究所研究員
 ベルディムロドフ・アムリディン ウズベキスタン科学アカデミー考古学研究所所長
 ボゴモロフ・ゲンナディー ウズベキスタン科学アカデミー考古学研究所上等研究員
 寺村 裕史 国立民族学博物館准教授
 宇野 隆夫 帝塚山大学教授
 宇佐美 智之 立命館大学助教

The fire layer that covers the Citadel: Excavations at Kafir-Kala, Uzbekistan (2018)

MURAKAMI, Tomomi Research Fellow, Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University
 BEGMATOV, Alisher Research Fellow, Turfanforschung, Berlin-Brandenburg Academy of Sciences
 BERDIMURODOV, Amridin Director, Institute of Archaeology of Academy of Sciences of Uzbekistan
 BOGOMOLOV, Gennadiy Senior Researcher, Institute of Archaeology of Academy of Sciences of Uzbekistan
 TERAMURA, Hirofumi Associate Professor, National Museum of Ethnology
 UNO, Takao Professor, Tezukayama University
 USAMI, Tomoyuki Research Associate, Ritsumeikan University

1. はじめに

2005 年度から始まった日本・ウズベキスタン共同調査(日本側は 2005 年～2013 年度まで国際日本文化研究センター、2013 年度からは帝塚山大学。ウズベク側はウズベキスタン共和国科学アカデミーサマルカンド考古学研究所)は、ユーラシアにおける東西交流において大きな役割を果たしたソグド人の歴史と文化、およびシルクロード交流の実態解明を目的として、ソグド人の本拠地であるソグディアナ地域(ザラフshan 川中流域)において調査を実施している。2013 年度からはカフィル・カラ(Kafir-Kala)遺跡シタデルの発掘調査を行っている。

カフィル・カラ遺跡は、ソグディアナの中心都市であるサマルカンドの南約 12 キロの地点に位置している(図 1)。この遺跡の性格については見解が分かれるが、現在では中世アラビア語史料に見られる「サマルカンドの王たちの離宮」にあてると見方が有力である。

2. 2017 年度までの調査概要

これまでの発掘調査により、シタデルはほぼ全域が 8 世紀初頭の火災層で覆われており、その直下に豊富

な遺物・遺構が包蔵されていることが確認されている。火災層から出土する最も新しい時期の貨幣はタルフン王(在位 700～710 年)のものであり、この王の在位期間ないしそれ以降の時期に火災が生じたと推定される(ベグマトフほか 2016、2017、2018 参照)。さらに、シタデル北東部には大型建物や壁画が存在していたことなどが明らかになった(ベグマトフほか 2016、2017、2018 参照)。なお、火災層の上層でも限定的に遺構が確認されており、これまでにアッバース朝、タヒリー朝、サーマーン朝、カラハン朝時代の貨幣や土器断片が出土している。シタデルではイスラム期(サーマーン朝かカラハン朝時代と推測される)にも火災があったことが明らかになった。

2017 年度の調査では、主に上述の大型建物内部の最奥部(北東部)に位置する 3 部屋(R13、R15/16、R17)を調査した。R17(5.8×4.5 m)は貯蔵施設と推測され、部屋の方形区画範囲に土器が集中するとともに、入り口付近において炭化木材と金属類が多く見つかった。シタデル南西部の R13(6.1×3.3 m)では、火災層の床面から王冠の一部と推定される青銅装飾やソグド貨幣、金属類などが出土した。床面から炭化木材が殆ど出土しないことから、火災後に清掃され再利用され

たものと推測される。最奥部中央のR15/16(4.7×6.4m)は床に焼成レンガを敷き詰め、中央アジアにおけるゾロアスター教の中心的な女神や供養者を彫刻した木彫板が数点出土した。木彫板の取り上げを最優先に実施したことから、R15/16は2017年度中に完掘できず、残された箇所は2018年度に調査することとなった。

3. 2018年度の調査概要

3-1 発掘調査

本年度はR15/16を完掘し残された木彫板を取り上げるとともに、同じくシタデル最奥部に位置するR11(5×3.5m)、R12(11.20×3.10m)およびR11の南に隣接する一角にトレンチを設け調査を実施した(図2)。その結果、R12はアーチ状の屋根を持ち二階建てであること(図3)、R15/16の中央に位置する階段状遺構など(図4)、新たにシタデルの構造が明らかになった。2018年度調査によりシタデルはほぼ全域を8世紀初頭の火災層まで完掘したが、R12の火災層中に予想を上回る遺物が包蔵されていることが明らかとなったことから、R12の調査は来年度に行うこととした。火災層中からの主要出土遺物としては、R11から出土した人物文土器(図5・6)、R12から出土した骨製バックル、ソグド貨幣、開元通宝、R15/16から出土した家具と考えられる杵状木製品、木彫りの人物像と馬像、花文様の染布、そして各種の金銀石玉製装飾品類である。

3-2 貨幣について

今年度の発掘調査で10点余りの貨幣が出土した。そのほとんどがソグド貨幣であるが、開元通宝とイスラム初期の貨幣も1点ずつ確認されている。

Room 11 :

- ・オックルト・チャムック王 *'wkkwrt cm'wk MLK'* (620~640年頃) 1点
- ・タルフン王 *trxwn MLK'*(700~710年) 1点
- ・グレク王 *'wr'kk MLK'*(710~738年) 2点

Room 12 :

- ・開元通宝 1点
- ・ワルフォーマン王 *βrxwm'n MLK'*(655-675?年頃)(Type II) 1点
- ・未同定の貨幣が4点(内2点はソグド貨幣。1点はイスラム初期の貨幣と推定される。もう1点は現時点では不明)

Room 15/16 :

- ・同定不可能な貨幣が1点。保存状態が悪く、文字が見えないため判定は難しいが、サイズなどからしてタルフン王の貨幣と推定される。

3-3 保存処理および科学的調査

出土品のうち金銀製垂飾、貨幣、および染布はクリーニングを実施した。銀製品は錆で覆われた状態であるが、2019年度以降にX線撮影や元素分析等の十分な予備調査を経てからクリーニング等必要な保存修復を施す必要がある。なお、銀製獅子面の表面にはわずかに金箔が残存していることからクリーニングは行わない方針である。

2017度に出土した女神ナナーと供養者たちが彫刻された方形木彫板とアーチ状木彫板は、取り上げ時に付着していた土を取り除き、現在彫刻面を上にした状態で保管している。この状態で新たに模写図を作成した(図7)。彫刻面には取り上げ時に使用したパラフィンとパラロイドB72が塗布された状態であることから、2019年度以降はこれらを取り除き、被熱により亀裂が入り波打った木彫表面を平らな状態に戻す作業を行った上で改めて薬剤を塗布し硬化させ、展示可能な状態にしなければならない。

科学的調査結果として、炭化木材を走査電子顕微鏡で観察した結果、木彫板および建築材はヤマナラシ属(ポプラ)、建築材の一部にトネリコ属、カゴ状木製品はヤナギ属であることが分かった(北海道大学農学部渡邊陽子氏による分析)。さらに出土染織品の材質は縄状繊維製品を除きすべて綿であることが明らかになった。

4. 階段状遺構と宝飾品類

R15/16では方形に組まれた用途不明の杵状木製品が出土した。木製品には緑および青色で染織された花文様の染布が付着していることから、木杵は装飾的価値のある布によって外張りされていた可能性がある。さらに木杵の直下からは馬の姿が彫られた木彫板が出土した。また連珠文や唐草文が彫られた棒状木製品が出土しており、中には擬宝珠状のものも見られることから、これらの部材は椅子など家具の一部であった可能性がある。さらに、長い髭を蓄え弓を持つ木彫りの人物像が出土した。

さらに部屋の中央に位置する高さ37cm、幅3m、奥行き60cmの階段状遺構の一段目溝内部から宝飾品類が出土した。階段状遺構には深さ27cmの溝が

掘られており、底には日干し煉瓦が敷かれ、溝内部は柔らかく細かい土が堆積していた。一段目最上部は他の床面同様に炭化木材で覆われ、外壁には火災時のものと思われる被熱痕が認められたが、溝内部の埋土にはほとんど炭化物は見られず、また内壁に被熱痕は確認できなかった。

溝内からは、赤石象嵌の銀製装飾品(首飾りあるいは冠か)および銀製獅子顔面(図 8)、象嵌材の成形加工された赤石および緑石、筒状銀製品、金製垂飾、金銀製垂飾、赤石象嵌の金製垂飾(図 9)、人物の顔面を刻んだ赤石(図 10)、用途不明の銅製品などが出土した。宝飾品類以外では羊の距骨が 10 数点と最も多く、次いで燈明皿が多い。その他、鉄製・銅製の小さな釘および鋸状青銅製品が合わせて 10 点ほど、骨数点、管玉が 2 点、土器小片が数点、ソグド貨幣が 1 点、桃の種が 1 点出土しており、祭壇的な印象を持つ。溝底部の両端には溝と直角に 27×27 cm の方形の横穴が掘られ、横穴内部からも金製品の一部が出土した。なお、この横穴がどの程度奥へ続いているのか、その構造を確認するためにはサーマーン朝期の檀状遺構を取り払わなければならないが、2018 年度は遺構の保護を優先して横穴の調査は中断している。

銀製装飾品には象嵌用の窪みが多数見受けられるが、象嵌材は楕円状赤石が一点残存しているのみであった。溝内埋土はふるいにかけたが、象嵌材としては楕円形や三日月型の赤石・緑石が 5 点出土しただけであった。このことから、象嵌材は自然に外れたのではなく、人為的に外されたものと推測される。

また、溝内からは多数の小さな金属釘が見つかった。これらは木製品に使用されたものと考えられるが、この部屋が木彫板を飾った特殊な場所であったことを考えると、木製品が神像であった可能性も大いにあり、首飾り様の銀製装飾品や金銀装飾品類は神像が身に着けていたという見方もできる。階段状遺構の周囲から

は大型の炭化木材が多く出土しているが、神像と特定できるものは残存していないため想像の域を出ないが、これらの木彫板や装飾品類、その他出土遺物を詳細に分析し慎重に検討していく必要がある。

5. おわりに

2018 年度の発掘調査では宝飾品類が出土するなど、昨年度の木彫板出土に続き大きな成果が得られた。宝飾品類が出土した階段状遺構は王座や拝火壇であった可能性も排除できないが、横穴のある構造や、なぜ装飾品類が埋納されていたのかなど不明な点が多く、さらに検討を重ねる必要がある。

宝飾品類については、年代はやや遡るがアフガニスタンのシバルガン遺宝に共通性が見られるとともに、北方草原地帯出土品との比較を行うなどしてその性格を明らかにしたい。火災層の年代は 8 世紀初頭であるが、木彫板は図像学的な観点から 5～6 世紀に製作されたと推定されている。2 世紀あまりにわたってこれらが利用されていた可能性があることから、宝飾品類の製作年代についても慎重に検討していく必要がある。

■参考文献

- ・ベグマトフ・アリシエル他、2018、「ウズベキスタン、カフィール・カラ遺跡のシタデルを覆う火災層—日本・ウズベキスタン調査隊の発掘調査(2017 年)」、『第 25 回西アジア遺跡調査報告集』62-66 頁
- ・ベグマトフ・アリシエル他、2017、「カフィール・カラ遺跡のシタデルを覆う火災層—日本・ウズベク調査隊の発掘調査(2016 年)」、『第 24 回西アジア発掘調査報告集』60-64 頁。
- ・Begmatov A., T. Uno, T. Murakami, A. Berdimurov, G. Bogomolov, H. Teramura, T. Usami 2016 “Excavations of the Uzbek-Japanese Expedition on the Site of Kafirkala”, International Conference on Archaeology of Uzbekistan during the Years of Independence: Progress and Perspectives: 116-118, Samarkand. —Mantellini S. and A. Berdimurov 2005 “Archaeological Explorations in the Sogdian Fortress of Kafir Kala”, in Ancient Civilizations from Schythia to Siberia, vol. 11, 1: 107-131, Leiden.

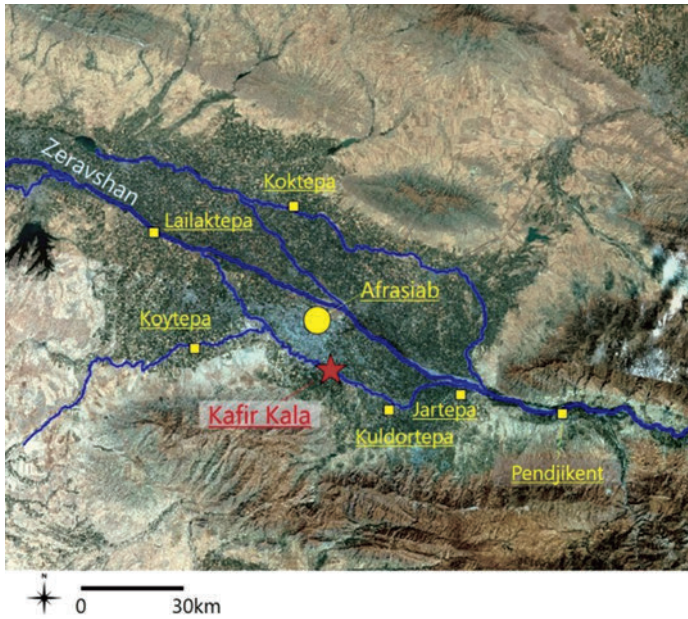


図1 カフィル・カラの位置と周辺遺跡

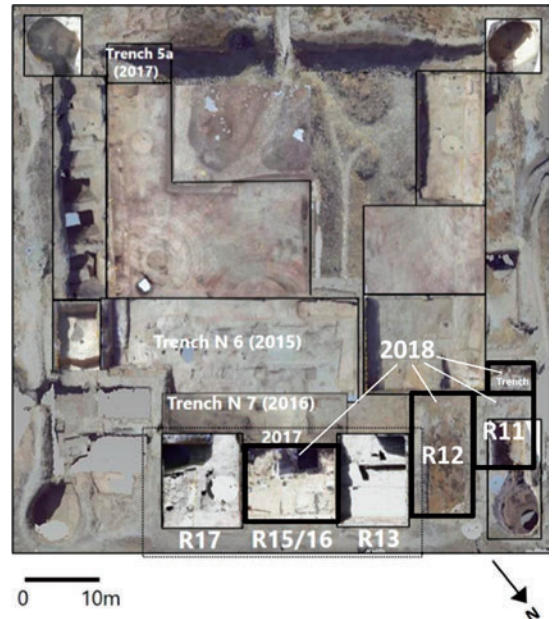


図2 シタデル全体図と発掘範囲



図3 R12 アーチ天井

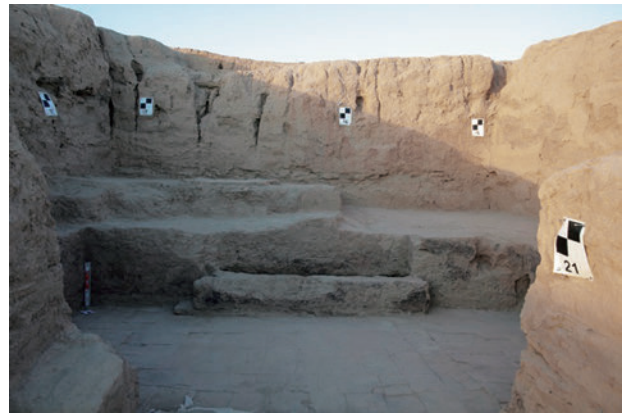


図4 R15/16 階段状遺構



図5 人物と植物文



図6 人物像

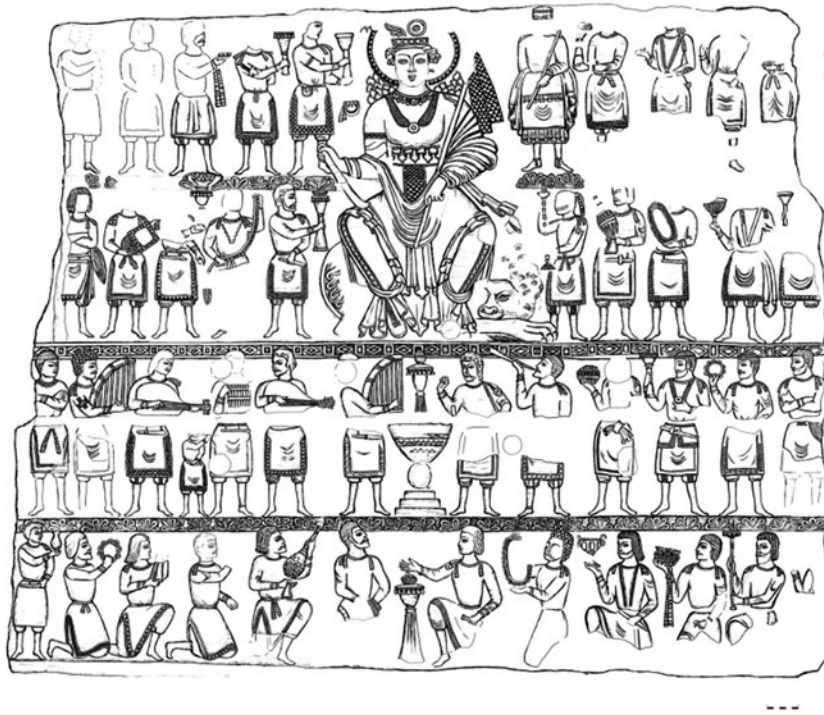


図7 方形木彫板模写図



図8 銀製獅子面と装飾品



図9 赤石象嵌の金製装飾品



図10 人面彫刻の赤石